



獨協大学特任教授 城崎 陽子

浦島太郎 その4

先回は「浦嶋子」が文学史の中で様々な文学作品に取り上げられ、どのように扱われているかをみた。今回はいわゆる「浦島太郎」の物語になるまでの経緯を解いてみたい。対象となるのはいわゆる「お伽草子」と呼ばれる室町時代から江戸初期にかけて作られた短編の物語である。これは、写本や絵巻物、奈良絵本などによって伝



講談社 絵本の浦島太郎 ©2011「浦島太郎」講談社

わった。このうちの二十三編が江戸時代に入った享保(一七一六〜一七三六)の頃に大阪の書肆・渋川清右衛門によって「御伽文庫」と名付けられて刊行され、その作品を「お伽草子」と読んだのである。以後、室町時代に成立したものも含め、これらを総称して「お伽草子」と読んでいる。「浦島太郎」の物語はこの中に含まれるわけだ。

内容をすべて掲載することはできないので、三浦佑之『浦島太郎の文学史』(五柳書院、一九八九年)を参考にしながら概要を示すことで、私たちが想起する「浦島太郎」の物語との比較を試みることにする。

- ①昔、丹後の国に浦島太郎という若い男がおり、漁によって、両親を養っていた。
- ②ある日、太郎が亀を釣り上げたが、亀は長寿のめでたい動物なので、海に返してやっった。
- ③翌日、太郎が漁の準備をしていると、船が難破して漂流して来たという美しい女性が小船に乗って近づいて来て、里まで送ってくれと言って泣くので、太郎は女の船に同乗して送って行くことになった。
- ④十日ほどの船旅の後に着いた世界は、言葉にもできない素

晴らしいところで、太郎はそこで女と夫婦の契りを結んで暮らすことになった。

⑤女の言うことには、そこは龍宮城で、四方を春夏秋冬の四季が取り囲むという不思議な世界であり、太郎は三年間を夢中で過ごした。

- ⑥ある日太郎は両親のことが気にかかり、女に暇乞いを申し出る。女は悲しみ、自分は前に助けられた亀で、恩返しのため夫婦になったのだと告白する。そして、決して開けてはならないと言って、美しい箱を太郎に渡すのであった。
- ⑦故郷に帰った太郎はすっかり様子の変わってしまった故郷を不思議に思った。自身の家のそばに、あつた家を尋ねると、古老が浦島太郎という男がいたのは七

百年も前の事で、太郎の墓だという古い塚が残されていると教えてくれた。

⑧驚いた太郎はその古い塚に行った。そして、今となってはどうでも良いと思いい、女のくれた玉手箱を開けてしまふ。すると中からは紫の雲が出てきて、太郎はたちまちに老人になってしまった。

⑨そして、太郎はどうも鶴になって飛んで行き、ついには丹後で浦島の男神として祀られ、龍宮の女も亀となって現れて、夫婦の男神となった。めでたし、めでたし。

この一連の概要をみると、古代の文学作品とは②の亀の報恩譚になっている部分や、⑤で登場する「龍宮城」がどのようなところなのかを説明する部分、さらには⑨の太郎が鶴になって飛び去り、亀である龍宮の女と共に

丹後に祀られたという後日譚など、内容が大きく変わっていることがわかる。

近代に入った明治三十六年(一九〇三)、国定教科書制度が成立し、翌年から国定教科書が使用されることになった。明治四十三年(一九一〇)に第二期国定教科書が編纂されるに及んで、小学校二年生の国語教科書に「浦島太郎」が採用され、以後、昭和二十四年(一九四九)の国定教科書制度の廃止まで当該の教材が採用し続けられたのである。

- ①ある日、浜辺で亀をいじめている子供がいたので、太郎はお金を出して亀を譲り受け、海に放してやっった。
- ②数日後に、浦島が釣りをしていると、大きな亀がやって

きて、先日のお礼に龍宮城に連れていくという。喜んだ浦島は、亀の背中に乗って龍宮城に行った。

③龍宮城には乙姫という美しい女性がいて、浦島を欲待し、御馳走や踊りで浦島をもてなし、浦島は家に帰ることも忘れて楽しい日々を過ごした。

④御馳走や遊びにも飽きた浦島は故郷に帰りたくなり、乙姫に暇乞いをすると、乙姫は「決してふたをあけないでくれ」といって、玉手箱を浦島に渡す。

⑤浦島は玉手箱をもらい、亀の背中に乗って故郷の浜に帰った。

⑥ところが、両親は死んでしまい、村の様子もすっかり変わっていた。

⑦悲しくなった浦島

が乙姫との約束を忘れて玉手箱の蓋をあけると、白い煙が出てきて、浦島はたちまち白髪のお爺さんになってしまった。

これを見ると、私たちが知っている浦島太郎の物語は国定教科書で定着したものだということが理解できよう。④の亀の報恩譚もさることながら、亀の背に乗って龍宮城へ行く件や、③の龍宮城での欲待の様子など、明治四十四年(一九一〇)に文部省唱歌として誕生した「うらしまたろう」の「乙姫様の御馳走に鯛や比目魚の舞踊り」の一節も想起される。

さて、古代文学から始まった「浦島太郎」の物語が、その物語を語る担い手やその物語を受け止める聞き手によって如何に形を変え、姿を変えてきたかを記してきた。懐かしい「浦島太郎」の物語の変遷もこのあたりで筆を置くことにする。

祝文化功労者選出

三宅義信さん来山

十二月九日(土)

十二月九日、三宅義信さんが参拝に訪れ、御杉苗奉納の御護摩を焚かれました。

三宅さんは、一九六四年東京オリンピックと、六八年のメキシコオリンピックの重量挙げの種目で金メダルを獲得され、引退後も後進の指導を行っておられます。その一つとして、福島県郡山市「のんびり温泉」施設内、重量挙げ訓練施設の「三宅道場」を開設されています。

また、NPO法人「ゴールドメダリストを育てる会」理事長を務めておられます。そうしたスポーツ界への貢献が認められ、本年文化功労者に選出されました。

三宅さんによりますと、「文化功労者に選ばれるなんて、夢の夢、想像もできなかった。光栄なことです。」とお話しされていました。また、「三年後の東京オリンピックでは聖火ランナーとして走ってみたい」と元気に語っておられました。



東京オリンピックが楽しみと語る三宅さん